

研究ノート

植民都市におけるホテルにみる文化構築の動態 —ベトナム・ダラットを事例として—

Dynamics of Cultural Constructions in Colonial Hotels: The Case of Dalat, Vietnam

大橋 健一*
Kenichi OHASHI

Abstract : The hotels constructed in colonial cities under the colonization process are the cultural focus of global/local, modern/traditional, and occidental/oriental nexuses. They are entrances to local societies, and at the same time, windows to the world. This paradoxical character of these hotels presents cases to explore the dynamics of cultural constructions in human migration under globalization. In this paper, the plural constructions of “Frenchness” of the hotel in different social contexts are analyzed by the examination of the case of *Le Langbian Palace/Dalat Palace Hotel* in Dalat, Vietnam, which was originally opened in 1922 by the French colonial administration and re-opened in 1995 after a major renovation project. The hotel as a cultural replica of metropolitan France in the colonial era now functions as a stage of a cultural spectacle for both local and international tourists in the post-colonial socialist Vietnam.

Keywords : 植民都市 (Colonial City)、ホテル (Hotel)
グローバリゼーション (Globalization)
ダラット (Dalat)、ベトナム (Vietnam)

はじめに

現代社会における文化の理解において、人間の移動のグローバル化に伴う文化の地球規模の連関を前提とした動態的把握が重要性を増している。

西欧による世界の「発見」とそれに続く植民地主義の展開は、近代世界システムの地球規模での拡大を促し、西欧において普遍化された制度、技術、価値観などは、アジアやアフリカなどの西欧による植民地化の過程において「近代化」というかたちで現地のさまざま

まな側面に変化をもたらした。

植民地化の過程で各地に建設された植民都市は、このような地球規模での人間の移動とそれに伴う文化の変化が凝縮された空間であると捉えられる。中でもとりわけ、西欧植民地各地に保養や観光を目的に西欧の近代生活や都市生活を凝縮した空間として建設された高原リゾート都市、ヒル・ステーションは、植民都市の中でも一般の労働と生活の場所としての都市に対するメタ都市であり、近代都市の利便（サービス）と楽しみ（社交）を兼備した空間として成立していたと同

* 立教大学観光学部教授/フランス国立科学研究センター (CNRS) 都市人類学研究所客員研究員

時に、西欧の優勢と近代性を見せつけるためのモデルであった(注1)。

このような植民都市にあって、ホテルという空間は、それ自体が移動者のための宿泊施設であることはもちろん、植民都市の社交の中心を成すとともに、植民地支配の橋頭堡として、宗主国本国と同じ生活を保証すると同時に、各地に本国文化を伝える装置として、また、植民地の文化を本国に吸い上げる装置として機能していた(注2)。とりわけ、西欧宗主国の近代性モデルとしてのヒル・ステーションに建設されたホテルは、その意味において、これらの機能をきわめて象徴的に体現する文化空間として捉えることができる。

本稿では、上述のような植民都市の一例としてベトナムにおけるフランスの植民地支配の過程で中部高原地域に建設された都市ダラット(Dalat)を取り上げ、植民都市における文化構築の動態を象徴的、集約的に観察する事例として同地に1922年に開業したホテル「Le Langbian Palace」(開業時の名称)に着目する。ホテルという西欧起源の施設がグローバルな人間の移動に伴ってどのように個別社会の文化的文脈に接合されたのか、そして現在接合されているのか。その結果成立したホテル空間においてはいかなる文化的動態が展開しているのか。ホテルという施設が持つ移動者のための宿泊施設という基本機能もさることながら、われわれは、ホテルという文化空間を通して都市を見直し、さらに都市という文化空間を通して人間の地球規模での移動と文化をめぐる問題に迫ることができるにちがいない。

アジアにおける「ホテル」のパラドクス

本稿においてホテルを植民都市における文化的動態観察の場として着目する背景には、アジアにおけるホテルという場をめぐる文化的パラドクスの存在がきわめて大きな意味を持つ。

先に植民都市においてホテルが持っていた「宗主国本国と同じ生活を保証すると同時に、各地に本国文化を伝える装置」「植民地の文化を本国に吸い上げる装置」という2つの異なるベクトルをもつ性格について触れたが、これらの性格は、換言すれば、「グローバル／ローカル」「西洋(オクシデント)／東洋(オリエント)」「近代／伝統」などのキーワードによっても捉えることができる(注3)。アジアにおけるホテルという施設空間は、一方において西欧において普遍化

された制度、技術、価値観などを反映させつつ成立しながら、他方においてそれらがアジア各地の個別の文化的文脈の中で機能していった点において、パラドキシカルでありつつも、ひとつの文化的接合の場を形成してきたといえよう。ホテルは個別社会への「入口」、「玄関」であると同時に、世界への「窓口」でもある(注4)。ゆえにホテルには普遍性としての施設、サービスが用意され、移動者の移動に伴うさまざまなリスクを縮減し、「快適性」が提供されていると同時に、個別性としての各地の文化的アイデンティティの表現の場や旅行者の抱くエキゾチシズムを充足させる場にもなっているのである。

これらのパラドクスを二項対立図式による問題の振り分けによってではなく、両者の動態の中に現象をとらえてゆこうとする際、アジアにおける「ホテル」は格好の素材を提供する。

植民都市ダラットの建設(注5)

フランスは、1867年にコーチシナ直轄植民地を、1884年にはアンナン保護領およびトンキン保護領を成立させたが、これらと平行して19世紀半ばから中部高原地域に対する経済的、政治的関心を高め、1876年には中部高原へ向けた最初の公式探検が行なわれた。その後幾度も行なわれた探検の中、1893年、医師Alexandre Yersinらによって行なわれた探検において今日のダラットを含むランビアン高原が「発見」された。

当時の総督Doumerが着任時から英国がインドに建設したシムラ(Simla)やダーージリン(Darjeeling)のようなヒル・ステーションの建設に関心を抱いていたこともあり、1897年から1898年にかけて2回の遠征隊が派遣され調査を行ない、1899年にダラットにサナトリウムをはじめとする複合リゾートを建設することが決定された。

このような中、フランスの植民者たちがダラット建設を通して実現しようとしていたものは、ひとつには、冷涼快適な気候の地に「フランス」的小宇宙を再現、創出することであったが、他方においては、「未開」の高地少数民族との出会いによるエキゾチシズムの充足でもあった。さらに少数民族の地としてのダラットは地政学的に軍事的戦略拠点としての意味も持っていた。すなわち、フランスに対して同化せず対立するベトナム人に対し、支配地域の非ベトナム系少数民族をフランス主導の元に連合し、同地域におけるベトナム

人支配に対抗させようとする戦略である(注6)。このことは結果としてその後のダラットへのベトナム人の移住を厳しく制限する政策を生み、それは間接的にダラットの「フランス性」の度合いをさらに高めることになった。

植民都市ダラットの建設を積極的に推進しようとした総督Doumerの1901年の帰国後、ダラットの開発は減速するが、1912年の総督Sarrautの着任以降本格化する。1915年に平野部との道路の開通によって年間を通じて平野部からのアクセスが可能となった。これを契機として、ダラットには多くのフランス人植民者を中心に西洋人保養客が訪れるようになる。1916年には総督Roumeにより、ダラット一帯の観光開発が決定され、さらに将来の仏領インドシナ連邦(L'Union de l'Indochine Française)の首都とする計画も浮上した。この計画を踏まえ、将来の首都にふさわしい設備をもつ施設として何よりもまず建設が決定されたのが、グランドホテル「Le Langbian Palace」であった。

その後、1921年に着任した総督Longは、総督府都市計画局の主任計画家Hébrardにダラットの総合都市計画の策定を委託し、1923年に承認された計画に沿ってその後の開発が進められていったが、それはこのグランドホテルとそれに隣接して広がる人工湖(1919年完成)を中心に計画されていた。

グランドホテル「Le Langbian Palace」の開業と「フランス」の構築

1916年、総督Roumeによって建設が決定された仏領インドシナ連邦を代表する第一級のグランドホテルは、その後1922年に総督府所有の「Le Langbian Palace」として開業した。運営は民間に委託されたが、総督府は多額の補助金をこのホテルの運営のために支出した。

1922年3月の開業には、総督Long出席のもとに開業式が行なわれ、客室38室(注7)、従業員68名(3名のヨーロッパ人:支配人、給仕長、女性マネージャー、65名のベトナム人従業員)(注8)の体制で、レストラン、オーケストラ、テニスコート、果樹農園、ダンスホール、乗馬などのサービス施設を備え、映画上映やジャズコンサートも行なわれた(注9)。果樹農園では、苺や高原野菜などフランスから持ち込まれた品種が栽培され、レストランでの食事に供された(注10)。また、ホテルの建築意匠には、フランス地中

海沿岸の避寒地各地のホテルに見られるようなロココ様式の意匠が用いられた(注11)。1930年代初頭の資料によれば、室料は一泊6ピアストルで、この金額はダラット市内の他のホテルの室料の約5倍に相当していた(注12)。

このように同ホテルには、その建築、設備、食事、立地などすべての面においてダラットを第一級のリゾートとするフランス人の意識が反映されていたとされ、中部高原におけるフランス植民社会のソシアリティの中心として機能していたことが指摘されている(注13)。ベトナムにおける「フランス」の小宇宙としてのダラットにあって、同ホテルはさらにその小宇宙の核を成していたといえよう。

しかし、他方において、「フランス」構築のベクトルは、アジアにおけるホテルをめぐるもうひとつのパラドキシカルなベクトルをも内包していた。ダラットそして同ホテルを訪れる西洋人保養客・観光客が求めていたものは、「フランス」のレプリカとしての施設、サービス、アメニティであると同時に、エキゾチズムの充足でもあった。当時ダラットを訪れる西洋人の間では、ジャングルでの狩猟がさかんに行なわれていた。中部高原地域の少数民族は、狩猟のガイドとしてさかんに利用された。また、彼らの集落訪問は、ダラットにおける観光アトラクションの重要な部分を成し、それは今日にも続いている。植民地における「フランス」の再現とエキゾチズムの充足は、相互にパラドキシカルでありながらも、ここにおいては表裏一体化し、相互にそれぞれを際立たせあっている。ダラットにおける「フランス」の構築は、このような対他性の所産でもあったといえよう。「Le Langbian Palace」というホテルが、そのようなパラドキシカルな空間として成立していたことは、当時のホテルの広告によっても知ることができる(図参照)。

総督府の主導により、いふならばその威信をかけて第一級の施設、サービスを提供するホテルとして建設、開業した「Le Langbian Palace」ではあったが、その維持、運営には多額の資金を必要とした。1928年に始まる仏領インドシナの主要産品であるゴム価格の下落、そしてその後の世界恐慌という経済環境の悪化の中、同ホテルが開業時にその「フランス」性として誇った壮大さ、豪華さは、次第に総督府政権内部でも財政的浪費と捉えられるようになった。1930年代同ホテルの経営実務担当者と総督府の間では、同ホテルの経

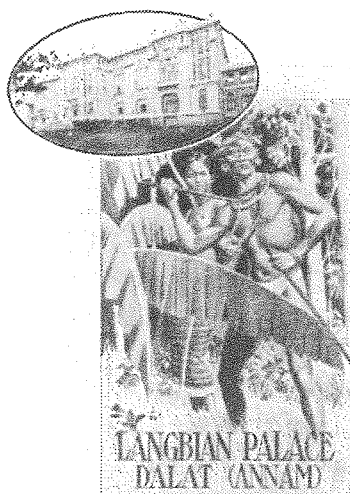


図 1927年*Extrême-Asie*誌に掲載された Le Langbian Palace の広告 (Hotel Sofitel Dalat Palace 提供)

営方針をめぐる意見の対立も見られた。総督府側からは、同ホテルを閉鎖し、政府庁舎に転用する案も示されたが、この案は棄却された。経営実務側からは、フランスにおける山岳リゾートを参考に、打開業としてのカジノの開業も提案されたが、総督府側はこれを却下した。

「Dalat Palace Hotel」の再開業と「フランス」の重層的再構築

1945年の日本軍によるダラットの占領期の接収を経て、1946年「Le Langbian Palace」は営業を再開したが、同年開かれたフランス政府代表とベトミンとのダラットにおける交渉において同ホテルは宿舎として使用された。1955年のベトナム共和国の発足後、1958年に同ホテルは「Dalat Palace Hotel」と名称を変更し、経営陣もベトナム人に替わった。1975年の南北統一後もホテルとしての営業は継続された。

同ホテルをめぐるさらに大きな転機は、ベトナムにおける1986年の「ドイモイ」と呼ばれる改革を伴う対外経済開放と現実的経済経営の導入以降の新たな経済環境を迎えた時期に訪れた。

1990年にダラットを訪れたアメリカ人実業家 Hillblom は、同ホテルに関心を持ち、その改修プロジェクトおよび関連事業に4000万米ドルという巨額の投資を行なった。投資に当たっては、当時アメリカ人によるベトナムへの直接投資に制限があったため、香

港に拠点を持つ投資会社を通じて、ベトナム側の政府系観光開発企業との間に合弁会社「Dalat Resort Inc.」を設立し、「Dalat Palace Hotel」の改修をはじめ、隣接するホテル(旧Hotel du Parc)やフランス式ビラの改修、バオダイ帝によって造られたゴルフ場の拡張整備などの事業を開始した。

「Dalat Palace Hotel」の改修工事は1991年から開始され、1995年5月にフランス系ホテルマネジメント会社「Accor Asia Pacific Corporation」傘下の「Hotel Sofitel Dalat Palace」として再開業した。ベトナム国家観光局は、同ホテルを「5つ星ホテル」に認定している。

改修に当たっては、「オリジナル」の「コロニアルスタイル」が維持され、「古きフレンチスタイル」と「伝統的ベトナム式ホスピタリティー」の融合が図られたという(注14)が、実際には内装に関してはほとんどの部分が改修を機に新たに上述の「フランス」性を意識して香港のインテリアデザイン会社によりデザインし直されている。特に興味深いのは、館内各所のドアノブや洗面所・浴室の金具類は、すべて改修を機に新設されたアンティーク仕上げされたものである。また、館内には2000点にも及ぶとされる(注15)ルノアールをはじめとするフランス絵画の複製絵画や彫像類が飾られている。ここにおいては、1920年代とは全く異なる文脈の中でそこに見られたものとは異なる「フランス」の再構築が見られる。

改修再開業後の同ホテルにおける「フランス」の再構築は、単にこのような物質レベルにとどまらず、さらに現代ベトナムの観光という文脈においてグローバルに流通する表象のレベルにおいても広く見られる。例えば、日本のある雑誌はベトナム観光特集において同ホテルを「仏領インドシナの名残をもっとも残している街」における「コロニアル風の外観と近代ヨーロッパ風の内装にフランス植民地支配の名残を感じさせるホテル」と紹介している(注16)。

「ドイモイ」以降のベトナムにおける政治経済的環境の中、観光産業によって生産される「過去」や「ノスタルジア」は、この事例のみならず広く見られる現象であるが(注17)、その中であってダラットは、そして同ホテルは、現代ベトナム観光における「フランス」イメージの中核を構成している。

ところで、このような新たな政治経済的文脈において再構築される「フランス」は、必ずしもベトナムを

訪れる外国人観光客によってのみ消費されているわけではない。ポストコロニアル期のベトナムのローカル社会においてもダラットそして同ホテルは、ベトナム人の観光消費における重要な対象となっている。われわれは、ここにまたもうひとつの異なる「フランス」の構築を観察することができるだろう。

ベトナム・ローカル社会においてダラットは、新婚旅行先として人気のある場所になっている。もちろん、外国人を主たるマーケットとして営業されている同ホテルをベトナム人新婚旅行者のすべてが利用しているわけではない。しかしながら、ベトナム人マーケットに同ホテルが喚起するイメージが消費されているひとつの象徴的な現象として同ホテルを背景、あるいは舞台としてベトナム人新婚旅行者たちがさかんに記念写真撮影を行なっていることに注目しておきたい（注18）。ホテル玄関前に「展示」されている「シトロエン」のクラシックカーは、このような記念撮影における重要な小道具となっている。そして上述の一連の改修過程を通して再構築されたホテルの「フランス」風建築と内装は、彼らに格好の舞台を用意している。興味深いのは、ホテル側もこのようなマーケットに対して一定の料金をとってホテル館内、客室を記念写真撮影の舞台として開放していることである。スーツ、ウエディングドレス姿のベトナム人新婚旅行者たちは、ホテルの前庭、玄関、ロビー、そして客室のベッドやライティングデスクの傍でカメラマンのさまざまなポーズの指示に応じている。

考察と課題

本稿では、地球規模の人間の移動に伴う文化の動態分析の切り口として、植民都市におけるホテルに着目し、フランスによるベトナムの植民地化の過程で建設された植民都市ダラットの事例の素描を試みた。ホテル、とりわけアジアの植民都市におけるホテルという空間が提起する個別性と普遍性をめぐる文化的動態というテーマの探究を今後さらに深めるに当たって、ダラットの事例から導かれるいくつかの観点、課題を検討しておきたい。

本稿でとりあげたダラットという植民都市と、そこに建設されたホテル（Le Langbian Palace/Dalat Palace Hotel）との関係をめぐって、まず気付くことは、ダラットという植民都市の建設においてこのホテルという施設が他のどの都市施設よりも先んじて建設

されたという点である。もちろんそれは、このダラットという都市が植民都市の中でもいわゆるヒル・ステーションという一般の労働／生活の場とは異なるレジャー／リゾート空間として計画されたということによって理解することは可能であるが、青木の指摘するようにヒルステーションが「メタ都市」であるとすれば（注19）、そのような「メタ都市」においてホテルはひととき都市性の凝縮された空間、いうなれば「都市内都市」であり、ゆえに都市建設において高いプライオリティが与えられたと理解することが可能であろう。さらに一般化すれば、都市における都市性の象徴的空間としてわれわれはホテルをとらえることが可能であろう。このことは、本稿で試みたようにホテルを通して都市を分析する視点の有効性を再認識させる。

次に、1922年フランスの植民地状況下で開業したホテルにおける文化構築と、その後のポストコロニアル期に改修再開業した同ホテルにおける文化構築の比較検討からは、文化構築の複数性、重層性という論点が導かれる。そもそもダラットという植民都市、そしてその象徴空間としてのホテルの建設じたいが、フランス人による「フランス」の再現であったわけだが、そこに構築された「フランス」は、その後多様に異なる文脈においてさらに重層的に再構築されていった。

このような文化の重層的再構築とそこに見られる文化の複数性の観察とそのメカニズムの解明こそ本研究が目指そうとするものであるが、未だ予備調査段階にあるため本稿では、限られた観察結果の提示にとどまってしまった。植民都市におけるホテルという空間をめぐる普遍性と個別性の相克と接合状況に関するさらに詳細な観察の報告とその分析は別稿に譲ることとしたい。

注

- 1) 青木1998:173, 227-233
- 2) 角野1996
- 3) Sanjuan 2003:5
- 4) 長谷川1994
- 5) ダラットの開発過程については、既に大橋1999においてその概要と文化的社会的含意を論じた。
- 6) Jennings 2003:164-5
- 7) Jennings 2003:169による。Duron 1994:4には30室との記載もある。
- 8) Duron 1994:4
- 9) Jennings 2003:170-1
- 10) このような野菜、果物、花卉品種のフランスからの

移植は、ランビアンパレスの果樹農園のみならず、それ自体が「フランス」のレプリカを目指していたダラットにおける農業のありかたを規定していた。今日に至るまでダラットはベトナムにおけるこのような西洋野菜果物の一大生産地であり続けている。

- 11) Wright 1991:231。しかし、その後1943年には、開業時のロココ様式のファサードはモダニズム様式のファサードに改装された。Jenningsは、このファサードデザインの変更にフランス・ヴィシー政権下のDecoux総督体制の政治的含意を分析している。
- 12) Jennings 2003:180。Duron 1994:4によれば、一泊13～22ピアストルとの記載もある（開業当時と思われる）。
- 13) Reed 1995:51
- 14) 同ホテルプレスリリース「Hotel History」における表現。
- 15) 同ホテルプレスリリース「Hotel History」による。
- 16) 弓狩 2000
- 17) Kennedy and Williams 2001を参照。
- 18) 中国上海においても同様の観察がなされている。Ged, Françoise. "Urbanité, modernité et permanence du grand hôtel shanghaien" (Sanjuan ed. 2003所収)を参照。
- 19) 青木 1998:173, 227-233

付記

本稿は、平成15年度オープンリサーチセンター整備事業「人の移動と文化変容に関する総合研究」の研究成果の一部である。本稿で用いたデータの収集にあたっては同研究プロジェクト研究費が用いられた。また、客員研究員として滞在中のフランス国立科学研究センター都市人類学研究所には、本稿執筆に際し快適な環境を提供していただいた。記して謝意を表す次第である。

参考文献

- 青木保『逆光のオリエンタリズム』東京：岩波書店、1998。
- Crossette, Barbara. *The Great Hill Stations of Asia*. Colorado: Westview Press, 1996.
- Duron, Bruno S. *The Dalat Palace: A History of the Past, Today*. Dalat: Dalat Resort Incorporated, 1994.
- 長谷川堯『日本ホテル館物語』東京：プレジデント社、1994。
- Home, Robert. *Of Planting and Planning: The Making of British Colonial Cities*. London: Spon Press, 1996. (布野修司・安藤正雄監訳・アジア都市建築研究会訳『植えつけられた都市－英国植民都市の形成』京都：京都大学学術出版会、2001)
- Jennings, Eric T. "From Indochine to Indochic: The Lang Bian/Dalat Palace Hotel and French Colonial Leisure, Power and Culture" *Modern Asian Studies* 37 (1), 2003, pp.159-194.
- 角野博幸「ヤマトホテル巡礼 都市とホテルの空間文化誌第1回〈拠点 哈爾濱ヤマトホテルを中心に〉」『SD』1996年2月号
- Kennedy, Laurel B. and Williams, Mary Rose. "The Past without the Pain: The Manufacture of Nostalgia in Vietnam's Tourism Industry" in Hue-Tam Ho Tai ed. *The Country of Memory: Remaking the Past in Late Socialist Vietnam*. Berkeley: University of California Press, 2001, pp.135-163.
- King, Anthony. *Colonial Urban Development: Culture Social Power and Environment*. London: Routledge, 1976.
- 町村敬志「グローバル化の都市的帰結－移動者視点から見た都市」『岩波講座現代社会学第18巻 都市と都市化の社会学』東京：岩波書店、1996, pp.189-211.
- Norindr, Panivong. *Phantasmatic Indochina: French Colonial Ideology in Architecture, Film, and Literature*. Durham: Duke University Press, 1996.
- 大橋健一「アジアにおける近代性と植民地都市－ベトナム・ダラット開発史ノート」『立教大学観光学部紀要』第1号、1999, pp.48-54.
- Reed, Robert R. "From Highland Hamlet to Regional Capital: Reflections on the Colonial Origins, Urban Transformation, and Environmental Impacts of Dalat". in A. Terry Rambo, Robert R. Reed, Le Trong Cuc and Michael R. DiGregorio eds., *The Challenges of Highland Development in Vietnam*. Honolulu: East-West Center, 1995.
- Sanjuan, Thierry ed. *Les Grands Hôtels en Asie: Modernité, Dynamiques Urbaines et Sociabilité*. Paris: Publications de la Sorbonne, 2003.
- Wright, Gwendolyn. *The Politics of Design in French Colonial Urbanism*. Chicago: The University of Chicago Press, 1991.
- 弓狩匡純「ラスト・エンペラーが愛した高原のホテル。」『エスクアア』2000年7月号、pp. 58-65.